

善為要方心要傳
 二編
 肆

^ 13
 3237
 12



門へ13
3237
12

昭和十年七月九日 購求

善知安方忠義傳第二輯卷之四

緑亀館文庫

東都

松亭金水編次

第七回

今長者正祿殊女深雪と娶係
高野非事理十代童と今長者小託と

善知安方忠義傳第二輯卷之四
第七回
今長者正祿殊女深雪と娶係
高野非事理十代童と今長者小託と
東都
松亭金水編次
善知安方忠義傳第二輯卷之四
今長者正祿殊女深雪と娶係
高野非事理十代童と今長者小託と
東都
松亭金水編次

善知安方忠義傳第二輯卷之四

ぐう白土の埋こ煉堀冠木門とと。魏めあう造とて四きも怕明なり
 あまのいんこまことひ称へて新深の今長者とぞ渾名をける正福元うり
 篤実ゆて物の慈悲哀とぞ知り。今かく後者の才とありて何のつと
 ぐげ下奴婢女ね多つひて不足るに才ありたき。或所の田圃小あて
 奴僕等と門ドく草と荻漁獵あるととこの深き之出で鱈と魚ひ運び分
 限と願えそ才の勤小怠らび且佛法小深く皈依して菩提寺のいふ
 及をば行脚修行の僧あまが拒き入まて米俵とよえ式ひ齋と信
 寄して尊敬すると師父のどし。かく善心ありのるまこと生死流轉の
 穢去小生まと因果の道も疑さあや。その妻小百合あるのいその年四十を
 こよほり 頼ていと貞実なるものありが。仮初の病より。稍小守りゆくまよ
 医療祈待のいふも更なり。心のあづ隈る残るころく抱きけまこと定業

のやありけん玄年のま僅九歳の稚児と。その造替として音小暮た
 世と辞しうべ正福と始と。家族の歎とたこのなう後と。性く飯らぬ
 冥去の旅の貴さ歩と免うるまこと暁る。稚と女児是竹と。
 妻とも児とも愛と夏もも秋考て冬もまうく半小ありつ。抱る小正
 縁が業とのへるの。田畠百町成持て是を耕し漁の網も多く不持
 一。所の欄干甲乙小損料とらて貸とあえ。まこの家小も漁師と
 抱て目と漁獵小出中うつ。底まびそま獲物を計へ生ゆて鬻とさ
 小漬。まも乾物小らうらつ。徳必の舶の来る毎小價と定め法しとじ
 且米穀粟稗まで目と土庫の出入繁くを方りて目とる。老僕武助と
 ひりのあまといと味ある性るまご正福が家小在ぬ目の妻の小百
 合と徳合。金銀出入のともまも私あけけらひけまご正福のこの武助と三

るにのれおひの家... 万端と任せ... 果敢る... 武助が... 秀才と感... 正徳の... 活業と... 罪障を... 懸ら... 小等...

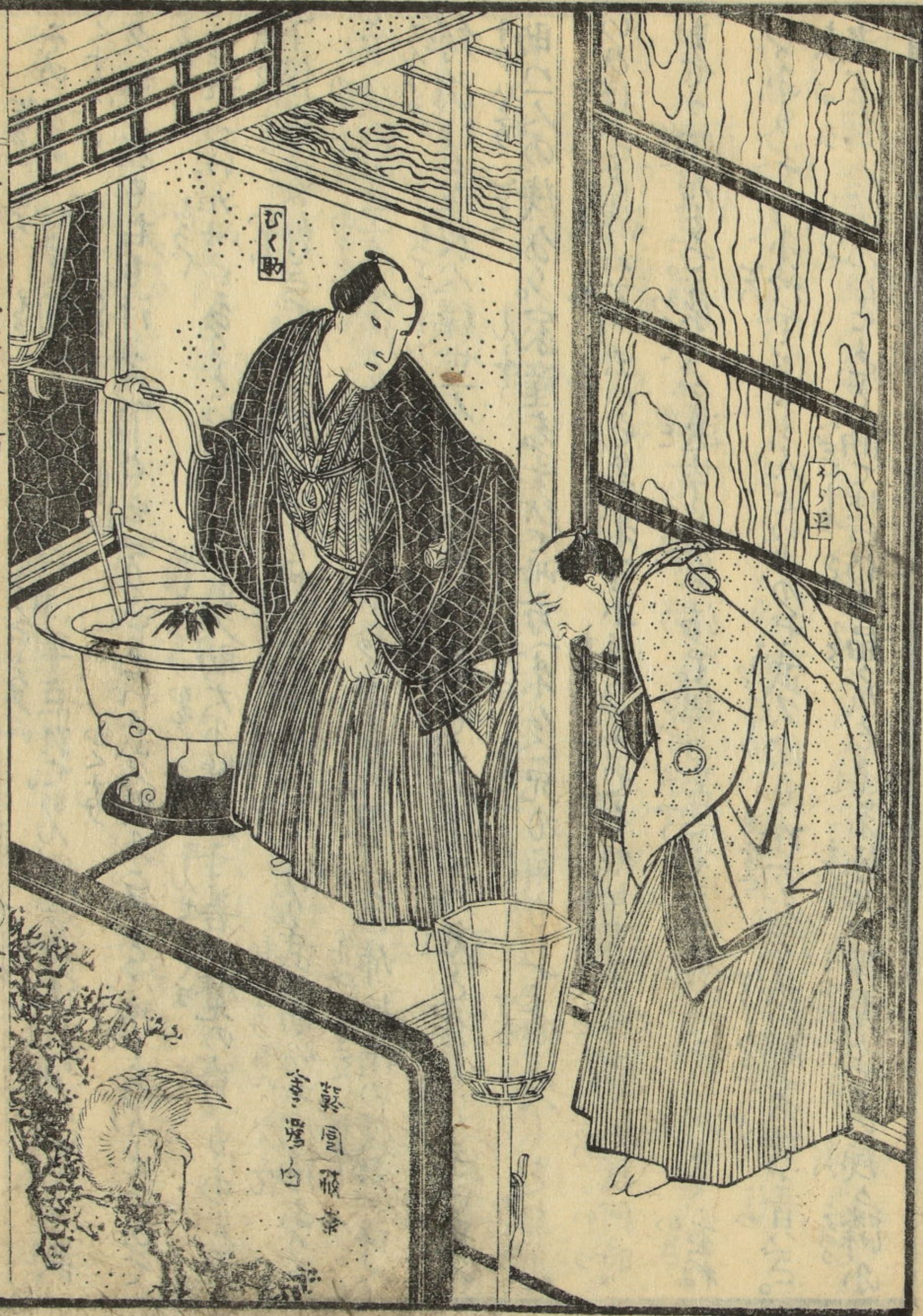
半日の困もい... 夫の免もあ... 呉竹の... 九歳小... 女の子... 業讀書も... 教... 妻が... 正徳の... 五十... 珠小... 法... 信... 朝暮... 小... 罪障... 懸... 小... 今年... 物小... 雨... 家業... 内室... 鳥解...

秘ど。家が派る肝要あるべからず。内室を遣へぬ。奈何あはん。と。久の正徳武久
うちを笑ふ。汝が母の最理あるべし。五十六あるも。今こゝに後死を要する
と。好とや人の後らん。その左もあま。其竹也。九歳を物心せ。言えぬ。まご
彩なる。母の親と。病くして。何とあり。家の内の和を。おあま。言へ。若し
ら。是のまご。心苦し。種あるん。や。万の自由あり。このあり。とも。此れ。乳を
悩ま。母の倍らん。乳。世を。祝す。不。継と。母子の。睦ま。いと。稀あり。お。怒。り。この
る。の。こ。と。久。武。久。助。押。か。し。その。仰。お。い。へ。ど。その。人。の。性。お。よ。る。に。物。の。及。理。も
辨。ま。人。を。知。ぬ。下。さ。の。妙。女。の。顔。なる。が。多。く。て。も。お。母。の。傍。に。の。こ。ま。れ。に。継。し。と
母子の。隔。も。お。あ。ま。未。作。ま。ぬ。例。も。あ。ま。ど。女。子。の。及。と。心。切。人。る。が。
継。し。と。ま。ご。尚。更。大。切。お。の。ま。る。な。も。ま。慕。ひ。懐。き。の。産。の。親。お。倍。る。も
あ。り。と。ま。ご。の。賢。愚。の。境。お。あ。ま。と。せ。る。と。定。規。ゆ。い。ら。じ。若。ま。ご。の。人。お。あ。く。

治より。親く。え。ひ。る。頓。離。縁。を。あ。ま。も。容。易。と。お。い。ふ。や。と。久。の。正。徳。武。久
助。が。白。う。ち。祝。や。を。て。呵。と。笑。ひ。出。し。今。こ。不。縁。女。る。の。在。ど。互。お。存。意。せ
し。い。祥。ふ。と。そ。昔。の。う。純。ま。け。ま。若。よ。ま。ご。の。あ。ん。時。免。も。か。う。も。あ。す。ま。ご。と
り。の。武。久。助。小。藤。を。進。め。よ。人。あ。ま。知。も。か。う。も。と。作。ま。る。が。実。ある。得。が。死。佳
人。の。い。ぞ。や。え。い。京。都。の。巾。所。ご。お。奥。勤。を。り。う。が。仔細。あ。つ。て。父。子。俱。之。の。暇。で
乞。て。柏。崎。小。由。忍。を。尋。ね。て。来。り。住。い。が。父。る。人。も。老。年。あ。て。先。づ。次。梓。せ。り。何
ま。の。人。小。も。身。を。傳。て。せ。送。て。む。や。と。病。う。き。縁。を。お。め。ぬ。人。ど。も。多。り。あ。ま。ご
柏。崎。の。髪。華。あ。れ。ど。も。商人。と。隠。蓆。作。の。と。あ。て。あ。つ。く。お。京。家。の。奥。と。勤。め。る。
人。と。い。へ。及。も。合。ひ。誰。娶。ら。ん。と。の。人。あ。く。空。く。月。日。を。送。る。よ。う。な。り。病。う。小。此。を。ど
その。人。の。志。より。ま。ご。奉。勤。の。と。曲。小。使。ら。る。が。て。ま。ご。を。病。り。け。さ。さ。ま。る。り。お。竹。の
乃。小。疎。く。は。總。計。さ。も。人。不。務。ま。潤。さ。る。と。の。る。に。あ。る。が。不幸。あ。て。天。離。都

小呻吟のころは父の没後縁ゆの身は頼少る兄弟の果あるは尼小
 きて生涯を安らう小送らんと月郷多る弘後の上人小そのよで特小けり
 上人のその光儀を熟見て凡そ女僧法師とありの世小使術る人の上り
 然る小かん身年若く容儀も携心こそ尋常小十倍せり且かん身が相
 と観る小不遠小良縁の末冬一努力をひ止まりねと強ていそきて詮方先
 出家せが止まりつ。そのどの家小在て小効績針線の業のこして在とこ
 かる途小不まことありた婦人のあるこそ幸ひるまじことと娶アて後死とあり
 めんゆの家のよし且懐さみのん為小頼りてもありたとありと尾小尾を
 ははて新後一頻く小勸めをけほど正縁のまご心決せは殊小三千小送らんと
 年齢も鉤あのを然れども京家小勸め女の子業とよくまると皮て
 是も慕りく必ありの強ても否まじとそを依あうちる武久助の主人が

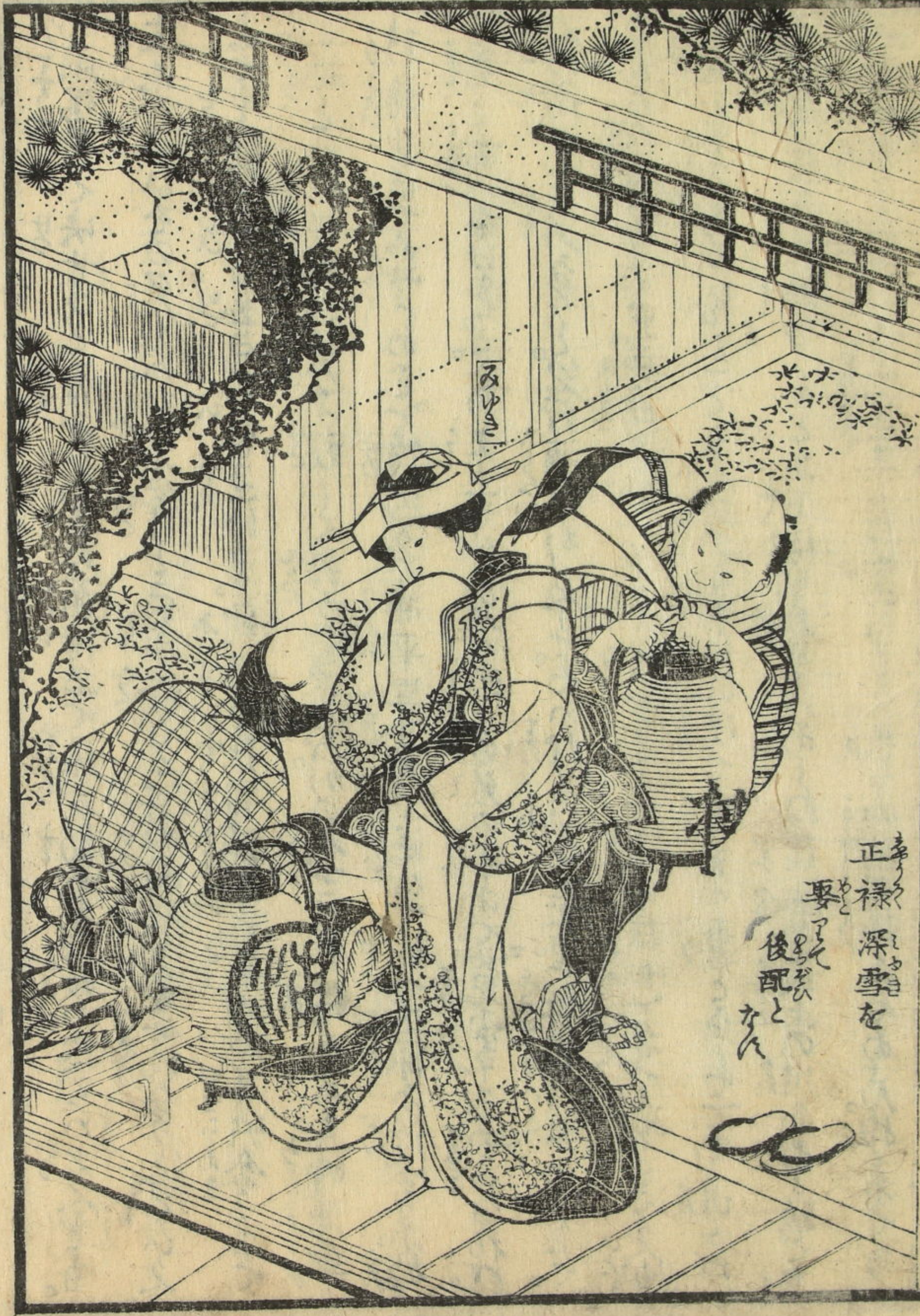
心両端めて決せほど否ありあぬ面持めて強小勸めあり敷くべくと
 主人といひその身あ祝小等とと年齢あると救回せんもせれありと
 是てき後いよ由おさげ目とさける新居の在宿浦平の年を耳吹ありあて
 正縁との信者懸計を小親しく行ふるまじかの人とこそ頼まめと一時浦平
 許訪ゆさて此の事と特じく浦平異まはほひて頻て正縁小終ず小
 て免るるありのほどその年二十八と人の世との身小女見小三女あるれば
 人の識りせあるありといふ浦平ありてその理小似まじも夫妻の縁の年小
 世間小多くあり。然れども人敷て識らば況て定まる妻とるまじや。惟り
 是と若くはと勸むるほど正縁も否ありあぬ福舟の最上の川小ありは
 水の辺方と人の身の末定まぬ世のありひ是も他生の縁やあん物ありて



心く野

平

新画 白



及ゆき

正禄 深雪を
要
後配と
女

その女も心なごうとらうと。
久助が左も右も汁まじりと云う。さきび武久助の事とて信守るといひて
呼込づけ。此の事ありといひけまじび武久助大に頼びて寸善尺魔の論へもあまじび
下僕並なる外にて。輝と頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
その後配と主人小次郎とその縁故と頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
頼附けの良人辞世一人の子小次郎と頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
助二人の持あり。家産をまじびて此方へ来た免角由してまじびと頼まじと頼まじと
いひけまじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
まじびと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
いふもして。小次郎と頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと
老とまじびと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと頼まじと

住つ。元來をく流し来し。のうらまへおの地小次郎と頼まじと頼まじと頼まじと
便所て朝夕親多く交らう間小次郎といふ小次郎と頼まじと頼まじと頼まじと
いふく焼刃自と痛つと。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと頼まじと
おのより。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと
おのるも。一時武久助小次郎の事とて。信守の事もある。焼刃の自と頼まじと頼まじと

新撰御膳手続

名小倍方彈明さ物のいひさるるまは是然りて賤くは其竹と念及るる。
 召仕小の情さうけ物といひ優けけま心十二分お歡びて是れ由全く武久助が。
 主とさふの忠義より出さるるといふ倍と渠とも重く用ひたり。再説月日のさふさの
 流る水より捷くく。その年の善と次の年の春を夏末を夏も果て朝夕の
 吹来る風の月小満。葉月の末となりける。年との頃さの法を杖と曳て衆
 生と濟度し。且病人の加持さるす小其結あふるるのけまへんことまを教
 へ生佛のどくひ罵詈高野非事理の源賢大徳。今年も法をすけ御をて
 ちあへありけま。縁て伝作ある老若男女非事理の在りけるまこと月との
 系消しけま。正縁えより佛を依るる身あるまへ源賢と深く信じてこの
 源賢由その志と感。師檀のどく交りける。是れ小園とる年の例のやく托。

まつその恙あるまを教びせえ。渾家深雪と申出て去年の冬娶りたる。はさ告て
 引合せさる教他ひなるる。あぞ源賢大徳のゆへも換らぬ。その志は感
 少名叔主人小宣あやう。まろたさるる体ともあるまを厚き托傳れ給ふこと分小
 ことて構りなま小統て足下等小時とて一糸あり是るる小童へ千代童
 とて奈は越中行脚の砌。お母との不之あひ不幸を憐とて救ひたり。引
 けまて行脚ありおいと何伶童あるまへ頂と刺てりさ養子とるる人のこと
 一。その素性を詳おさけは父の旅へ出て性方と名けり母へ老態とせんとし
 のの小教さる折よく伯小環にあり是れ自徳国を修りゆ。扶け曳まを伝傳小結
 藤と重秘ありし。おまをさ敢多く人小鬼下より人けま。死あんとせしを猶多く
 師お授けし。ま一とも辱しともいふ。河のいひ。假令四頂黒衣の身となる
 とお願ふま。あまねど母と伯との敵たりたり。且父が生死もまへ。その身病念小

老て親不知の泡と消るべし。夫も老るべし。師の天恩を必死と救はせし世も存命する
 上りの父が性方も身移る。母や伯が敵とも撃てり。人々の性なり。史書の所載と
 果せり。人の世を捨るも惜るべし。夫も老るべし。師の天恩を必死と救はせし世も存命する
 孝心といひまじや。人の世も老るべし。師の天恩を必死と救はせし世も存命する
 去るべし。師の天恩を必死と救はせし世も存命する。師の天恩を必死と救はせし世も存命する
 愛深けし。彼處へ伴ひて特まん。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり
 世も老るべし。師の天恩を必死と救はせし世も存命する。師の天恩を必死と救はせし世も存命する
 小の至るる。志とも果せり。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり
 大の執り。口を待とま。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり
 徳万地方を経て。今日湖く連末と。足下も夫婦。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり。いと乳健るる志あり

成長のつら。千種佛と遠く。この功徳も。ある信り。下。二。乃。信。ひ。の。人。と。や。奈
 何と。向。六。正。統。の。異。後。亦。及。之。び。領。掌。一。世。亦。便。る。人。の。あり。とも。仰。さ。る。と。死
 落命ある。昔語小の。吹。さ。る。と。あり。つ。小。も。今。より。昔。家。亦。亦。ひ。も。成。長。の。あ
 方の望。不。任。ま。さ。り。と。い。へ。深。雪。の。傍。より。この見。亦。信。り。や。目。鼻。も。あ。る。人。亦。あ。る。
 る。く。陋。した。亂。と。の。又。え。び。吹。さ。る。と。信。り。は。や。非。事。理。の。か。ま。亦。亦。仰。さ。る。と。死
 と。も。さ。る。の。病。命。ある。人。と。恵。む。の。大。善。功。徳。と。信。り。信。り。況。て。非。事。理。の。信。り。と。副
 あり。の。あ。る。と。也。異。行。が。同。胞。とも。必。ひ。做。と。育。て。信。り。ん。この。信。り。の。信。り。易。う。と。と
 夫。稀。枝。亂。不。流。ひ。く。源。賢。の。大。小。執。り。千。代。童。亦。亦。対。ひ。今。吹。め。つ。と。と。く
 あり。の。信。り。の。家。の。恩。亦。なり。史。書。の。人。の。主。親。と。必。ひ。朝。夕。仕。ふ。へ。母。の。敵。の
 面。体。恰。好。先。以。吹。つ。つ。と。あ。ま。び。行。脚。の。序。亦。心。づ。け。ま。れ。と。も。あ。り。の。あ。る。の。積。小。汝
 小。知。ま。さ。り。ま。る。果。敢。る。は。小。腕。の。容易。必。ひ。ま。さ。る。と。あ。る。わ。び。心。静。亦。信。り。と。候。比

あゝ心得よと後一あゝ千代童の稚心非多狸が情の涼うとまゝこゝろは
收よ美引うが様一と不覚不涙うとと後と着て身と平めよ此小侍と
まのまゝとつより他小辞もあ。その阿闍梨小供者す。こ紀の出来うと
庖厨より俾女が持出以膳給千代童も進めうと。俱小相伴なりすと
異竹と之居さあ中へ頓て食うも果けま。源賢の例の如く併る小と
着経は信老どのが侍つあん小今日ま。暇まじしをさあまこをまあと
人小暇と若果その小童がとばあ小侍とあす退りて正徳の香航まで
送里出札と正とつあこと若千代童の目來父ともるひ源賢小あは
この今さあ復く物もゆえ涙うと額働のこ何とあ小源賢も不
ろ小睡とあまて死跡とのんどと出りあゝ千代童の伸あを。教えぬまで
見送やう。名残惜し乳小をえけま。正徳のこるこ呼び今よりあ翁が見た

えあてあふけま。千方のまここまてと父とも母ともるひ做し異竹と
あひ点も隔つ心あ。欲とありのあふ。買てはせん。異竹よ
あひもあゝぬ見とゆ。中よりして假初小の弁ひする来月後あ
二人對るの衣裳とあせて踊え小連てあむ。翠より千代童小もあゝひと
さすへけま。入淋しく習ふより。何故もあまてま。いづく庭へ案内て泉水の
辨鯉とあせよ。昨日の雨で松山小初茸松霞の出うや。えてこよこのひま
異竹の千代童が。と把て庭へり。被方せ方を近めり。稚心小も便る紀老に
あてあゝ。あま生小あゝ草の花も。漢竹の筍など把て千代童あゝ。推
稚まこ。志の別保もえ。いと除きあゝ。たび居る。かて正徳の千代童が。推
あけま。とも容貌の丸あ。とるを涼く。渾家深雪小のひ合めて。代る
芳のり育けま。千代童も心甘て。実の祝のあひと。この次の目より。異竹と

机を並べても習い物債は盤の積るたど。一日も怠る暇あるの昔流
の繪冊あるとと把出。柳葱花をばせびらお放て正祿のつくまを
教ふのう。名を千代童と呼あんの何と申ん異するありとて千代松と改さ
めつ松と竹といのりとも小千年と契る千代の文字自托ある名詮自性以系
榮る祥ああんと人裡お正祿の秋ひおひて尋けり

第八回

洪沛糸遊危難小遭ふ
情慾を逞きて淫婦汗夫を以

再説深雪の此処へ嫁して一年お及べどもこの一日も怠る暇化粧のいり由
更あり。衣裳の薫物と造り磨きを粹らつ。その眉と赤むらやどお奴僕婢女
等のはせと従てあの内室の輝撫でまご年若くといへお都あ似合しり
らぬ。紅白粉の人目ごるえん京都の山所方お勅らほと受るまごまご癖の

矢ぬお四もこの人もまよくお守るるとの風波と極つてこの腹もくも極つ
びぬおの小檀船のそまおれお付ひ深雪ことらひの任するのさる近曾の
後生おひも非お止り垣の紙瓜をさする白い秋のと瞻望す。今まごのた
小満ごとも傍痛くのさるまご。と人ごりのへ應をまよれ務するて杜若のた
若るとのふ喻えこのひの何おかお元の容あに似ゆつて武久助力称も碎例
まごお小助す夜もお田る。とのお一人ごお力建のまごを付たまごのひの
内室と武久助力称のや情合の有るる動靜隣の疵をて次痛とす。
いぬおあのおるまご。もまごの付るるど互の目つてまごの心定
夫小差ひり。若らぬとらひるまご。抱むららるまご。とまごあまび。滅多な
とていひ出さるおてまごの身の人とまご今まごのまごの晴あ力建の
まごぬや。檀船のらひ以俚めらまご若もあはれも眼お入らぬとら情のたまご

おやとは様るまゝ下僕の平生武久助深雪が方のう人を徳るおはけけ正
 徳か。とさへもつる。あまけ。うらま。かまけき。とも。正徳の曾て。ままの。を。も。み。ん
 只言深雪が色香小泥と。渠が。搦。お。持。り。と。嗜。酒。の。夜。毎。の。對。身。小。
 指。の。太。く。碎。る。も。今。い。ろ。く。巴。上。り。お。め。り。あ。る。の。ま。の。深。雪。の。こ。ま。を
 僥倖。け。て。武。久。助。と。對。身。の。お。ち。の。あ。後。も。を。母。供。す。ま。せ。供。と。あ。り。これ。が
 自。心。の。お。小。換。り。内。外。の。者。も。眼。と。竊。と。と。社。比。歩。の。小。主。人。と。掠。め。取。り。わ。り
 日。の。ほ。し。の。み。米。煮。る。も。と。と。五。五。と。平。賣。と。と。入。屋。あ。ま。と。惟。あ。つ。て。心。の。つ。み。え。未
 豪。富。の。こ。の。れ。の。目。小。つ。つ。こ。ま。う。の。め。く。正。徳。の。心。程。小。弱。き。あ。り。か。か。ら。う。樂
 む。き。せ。い。め。の。あ。り。物。の。入。目。の。高。じ。と。の。仰。の。こ。の。ま。ま。と。こ。ま。二。生。の。流。る。と。胞。ま。を
 深。雪。小。心。と。春。等。の。日。月。と。送。る。あ。る。と。作。悦。分。兩。頭。と。小。西。條。高。資。が。女。見
 衆。の。心。の。あ。り。ま。ま。の。金。井。荷。助。小。枝。り。ひ。ま。ま。上。野。の。草。津。の。う。鬼。石。津。へ。い。ら。ん

と。その夜の終夜山越の捷徑と走む。既。小。の。夜。も。め。る。も。二。斗。え。ま。の。輝。け。り
 法。沛。の。盤。へ。り。二。軒。あ。り。白。亭。小。酒。沽。家。の。あ。り。と。後。ま。の。こ。の。入。り。と。雲。時。感
 取。る。と。と。眺。へ。二。個。の。朝。餉。と。後。ま。の。こ。の。入。り。と。七。里。の。法。分。れ。ど。
 小。の。小。負。難。が。少。く。暑。さ。不。忍。の。水。無。月。の。半。と。い。と。岩。あ。り。の。水。と。る。雪。の
 あ。り。の。と。今。い。ろ。く。跡。生。の。中。旬。堅。き。凍。小。道。閉。て。風。も。響。け。く。肌。膚。と。透
 さん。と。つ。け。て。歩。の。人。抱。の。ま。を。怒。る。小。新。ね。ま。の。草。津。の。つ。い。と。を。り。昨夜。の。山。路
 の。容。易。も。な。で。ま。ま。の。難。死。小。さ。り。か。る。と。さ。せ。便。ろ。く。と。慰。む。れ。い。ま。お。ん
 否。と。よ。貴。の。あ。り。と。の。昔。傷。苦。患。の。時。の。難。厭。ふ。ま。ま。の。傍。ら。わ。ね。と。抱。す。い。ま。お。ん
 小。の。苦。辛。心。が。う。と。め。ら。る。と。殊。の。父。と。母。の。人。の。い。ろ。か。る。と。後。後。引。る
 心。地。小。諸。願。て。歩。め。力。い。あ。り。と。と。知。て。兩。個。の。坊。小。あ。り。と。と。非。も。あ。り。女。を。生。れ
 果。敢。る。と。を。仰。つ。も。愚。痴。と。知。り。あ。る。と。と。涙。と。ま。ぬ。と。推。の。ひ。ね。と。の。ひ。ひ

候とて向て拭ふ睡の潤ひをさへまじりて壯夫の猛き人も弱り果てた
 息と吻とをの綴りてさうさうと先生の思慮深きまゝ老幼在すまゝ方小
 も仕損ふものといふありとさうさうと殊小里見も致付て後えをすけり
 老とて徳てあり在下のけん刃を返り。ささる小把て返して時宜小
 再び先生父子の足送るすべし。さうさうと業も苦しあひと慰められ
 奥がさうさうと父子のあま泣き止まずにわらう此処を渡せま
 二三名動也といふ入来り酒三合好とて酒菜いり早く帰むといひ
 向てわら密と点改あひ一個の漢士が腰を履め檀形をさうさうと
 後さうさうと少の暖さを凍まる雪の解をさうさうと深田の早苗さ
 濤落處女もど歩ゆられ。後小めさの替りて價と卑く早まう
 荷助いひて振屋年小四五度の往來する。さうさうと容るる

婢女奉公とせんとして侍ひてゐるまゝ。後小めさの替りて價と卑く早まう
 後さうさうと漢士と教え合せまゝ。何とさうさうと知ひ好む同志で人目
 引あふ。此方の畑あひ種りの應爛が出来さうさうと二杯をさうさうと
 彼方の床机小口をさうさうと糸拵の密さうさうと。這奴の正さうさうと
 名のこゝろん。今酒飲をさうさうと居る小。此方の急さうさうと
 怒まをさうさうと。依語バ荷助いひて。さうさうとや兎見もさうさうと
 在下兩又腰あり。いさうさうと心小けあひ。後小めさの替りて價と卑く早まう
 といひ宜し。頻と草鞋を履めといひ。さうさうと支度をさうさうと
 出候。その後影と轎夫をさうさうと。いさうさうとち親アをさうさうと
 小次を傾けさうさうと。かゝて糸拵と荷助の二人いさうさうと
 五町名め。いさうさうと。洗沫の雅不へさうさうと。さうさうと

山家小人のふるまひも常少の家内小居て歩ゆも別ぬ山阪を星ゆき小端く
測りて渾身も大少勞き殊小足之疼と出て今々七里のこの待と城ん
との容易き便り死にふも之とも松とのち一少松助が心配とせん
ど小のうらむらぬ醉めて良一里をり歩ゆりり小歩し小傍の難所之巖
石左右小連あり遠見二尺修りの路隘と小樹の生長里苦桂の縁と小
蔓纏あひて松柏の梢と埋とまど日の光りと遮りて傳えと之間穴もかく
かひあはしとど小をり。不き小肝と冷まの場あり。まこの切岸高くて樹の
根をばひかりく小登り中しく新あまび苔滑らる小足に重き山煙の蒸干と
あ人の歩ゆの音小連てまくと重あり落襟るんど人入るとあま。ま
身北の半生て半死する心地。息する毎小流肩あり。揮あろま秘なればかく
ての争りの禁へあつとのあるさぞと自ら心と励まて測る折る金井荷助の

嗟昔やくひも果び矢庭小礫と平浪伏の系柱の孩さ惑心ひらくか何小は
あふとまぎ抱へて引起し親まの面色蒼青て眼と眸を苦しむ景勢が毒なる
ど小中まや揺らぎの積とゆりの強く発り何小まも健てまらゆは
悩むらあて俄の病着のつらあつとぞと乳も轉倒さる小注方あつとるどり。
荷助の自ら心下と推へ苦痛を忍びて細さあつて在下持病小積聚ありて
年小二三度発るとあり。今日も不圖その病ひの強く発りゆりのあるま。一向
案のゆるよまらる時とのひ所さ生憎あて。ご一石の水ごゆま。便るは
ゆりるるる。要時あつた息するん。さあある樹の根小尻うちうけ足
休とへゆのひとのふごふの苦死るま。系柱の拳と握り脊をわくうらち鼓
さて持病とあつた程もあつた。せのふけまて。茶もあつた湯水さ心小任ぬ
ら山中殊小久まらね振去てあつた渾身へ濕氣の染透すよく痛とも募る

べ。是を敷て居る人として上忍の小袖と手を中脱身と下敷をればお助の
 斥きである抱と伏洋と吐息切さるるの護りふと車太ぬお特まれ
 る。この申斐あくも病発王却ておん刃の死なふありぬ。此を果敢なけ
 くと歎息してまは系柱の故意と微弁かくなり心弱るを人の病の急と
 波の何れかたよるも憂うまは心急ていり多くお隣りとなりて苦痛や倍は
 や病の急らるるお抱箱の中へ入らんを少くも早う愈えさせ
 意とありの人とはあひのひと心理の一方ありぬ憂あひ途方お暮るおそ
 おきこそ多く疾さるる。一筋あるる山治他へ世ごと方ありと鈍る
 声の波あつたお系柱の振むるを昔と等しくお沛と然り人のあふ
 こでとりなる程あく應こぞ爰ごくといふおの轎夫そまことりるより何と
 伊兵おまご眼鏡お五厘も遠いお人のおぬぬ山中と安心しそのおぬれど。

妻の衣と疋敷てといひ狂言嘯伊兵次次の奴等でおあつたといひ
 伊兵と呼らる漢士こそ頑七よく見えられ旅人の若女夫を方の眼鏡が遠い
 り妻の衣の疋敷てもぬまぶらるる病気の容子美しの處女さんが困つて
 唇の毒の毒る。俱か手傳ひて看病者て遣まのれ應夫といひるも
 けりくと立寄て癩疔疔痛う。ごまお替つて揉で進せ。處女さん
 そこ処で除ぬ人と肩へおとりけ押除る。當下系柱の者共が面を視れば葉の
 酒坊で兎見るんとおひつる漢士おありけま。系柱お心地思まを做し
 生憎荷助の急病お取落らまて要おまて若渠若お害心あつたおひつり
 こまを避んとお人の胸のこ裏こそ詮方あるてえりり。このお頑七も
 系柱が脊の方より緊と抱き急いお若女夫の看病でも一人お腕も繞るまの
 君おありへお歩り蹴山坂お然て怒りお来といひお換らんと抱除る。嗟やとらり

束縛の身と平めて抱きつる子と挿りんとあるやどお。扱も子法三處女よ。
 子劉の此方でも子劉く做さんそま合是れ在るの簾の酒坊で眼祭物
 とつと所が黄金花咲貨物と瘦浪人づり活の花と瞻望さるる惜いの
 奪とつて無名昌の土地へ活るが大分の黄金玉のすうる汗掻て僅の貨物
 囉ふより。早き早くと商後とて跡追蒐この山路心憎くも必ひる瘦浪人の
 不憶病の皇天さるが吾們へ濡子で粟のこの賜いご来の處女と引る
 荷助の皮より悔まらる小齒と切り満面小怒りと合こ眼と眸を殘忍无
 頼の汗滅とも。刃の病著小若むとも。やらるる子法おるつてござとこち
 あぐんと刃と死せど。苦痛小ゆぢびまこ撞と例もとつて兎兎の呵と
 冷きび一件汝と折殺して女と奪りん積るり。病氣でござとるざれば
 笑為無益の殺すまてと命冥加る瘦浪人跡を死ぬとも活るとも積る小

志まるとしひらびら。泥膠あびてぬ返せが荷助の悔と勝と断難むらと小とこも
 まへ衝あぐる積聚の痛と。嗟といひり刀さく抜とらるる朱と汰とる時
 あけて白眼のこお社の當下小遁まね所と覚悟の父が夜踏の後で小さて
 共えつる佩副の短刀晃下とひこ抜てまてとつて背する頑七目勢と突
 かまびこを中浮雲のいと刃と括と右手で伸して糸拵が。利腕緊と引
 こそ人矢度小短刀扱把てさて怖とこ處女くる。手乃とる中あひのすりみ
 禍ひがわらうの志まらび世のちやまくと。言下より後方る。兩個の轎夫
 が早ある後準備を志らん麻痺小渾身と纏向糸拵が。悔しけれとも女
 るの甲斐あるさ。手乃足揪て使小お籠と。法着るれへ頑七伴兵の左右と
 後山と山崎と花がく小走去らる。荷助の苦痛のその中あて。つて心と方せ
 ぐ。この時勢勢とてあ法と覚えん。手乃手乃。存亡更小知るべとび



遊崎小
 糸遊危難小
 八八



庚申吉田

その後この條不鮮べ。粵不新浮の今長者鮮原の正祿の篤実謹みの老ま
 ことども。多不溺るる常人の慣ひ年々も耳順か向とて年若く熟藤なる。
 皎女子を娶ふまじ。亦る死のめ不冠屯してそれグ勸め不替まぬ酒もあ
 頃ハ飲むらひつ。厥不深雪と式久助が揺がりさ不及び内外のものもたさ
 の知るといども正祿のつゝその愛不眼眩とて。こまごま不養不もあるより
 その年もくまもをゆや。ぬ月中旬とらりけるが。正祿のあやとさる。或ひハ
 痛敗暈。小腹の力の減るあや。歩むも平老のゆるるす。とい全く逆上の遠さ
 せやゆんぞんと功後ある茶もど用ひても除け。実あや年老て整藤なる。
 若き女も愛ととと。美陰枯燥とて病ひとせ。と函まあハ洋るるもの
 々々。あハ心も若く。假初不ひさ。更不情むともせ。あ不許て
 自ら。暮るがどく。せんあま。醫師と特と。保甚とさる。不繁華といども

約と遠ひ此処。昔法。不名。医のあ。び。こまごま。正祿の目とま。後。茶と。と。と。と。
 功後。り。や。と。く。辛。ト。る。折。々。社。官。浦。年。が。行。あり。四方。八方。の。物。後。且。正
 祿。が。病。の。さ。ぬ。と。等。と。せ。り。さ。う。わ。ん。が。の。ま。ご。り。あ。の。さ。や。當。國。蒲。原。輪
 足。の。郷。の。跡。灰。の。焚。る。る。が。玄。年。の。妻。の。ひ。あ。や。あり。らん。不。計。温。泉。の。涌。出。て
 これ。不。備。する。りの。男女。とい。さ。び。痼。疾。沉。痾。の。治。り。さ。れ。も。極。め。て。使。療。の。功。あり
 と。て。當。國。の。い。ふ。あ。る。さ。び。近。む。休。去。の。老。ま。も。集。會。の。り。湯。宿。も。延。之。後。の。ひ
 たる。さ。ら。う。ね。お。より。湯。宿。あ。の。さ。ら。ぬ。女。子。と。ね。多。抱。へ。て。旅。客。を。慰。む。こ。ま。ご。ま。
 湯。女。と。呼。ぶ。と。唱。ね。お。さ。る。の。の。す。り。と。ま。ご。ま。も。疝。氣。の。病。ら。ま。の。性。を。沐。ん。と
 ぬ。ん。ど。も。一。人。淫。ん。の。辭。悒。て。今。ま。ご。の。默。止。と。り。若。わ。ん。が。性。の。の。法。俱。お。さ。る。と。
 と。ま。ご。正。祿。の。貞。改。の。い。ふ。も。精。足。の。温。泉。の。活。流。凡。お。さ。る。が。天。の。の。功。後。あり。と。も
 たる。さ。ら。う。さ。の。い。ふ。を。さ。ら。ぬ。の。り。の。さ。ら。ぬ。を。さ。ら。ぬ。と。い。ふ。不。深。雪。の。待。り。

その誰かぬのぬのぬ。殊に秋痛血暈の即切の事とて人の浦平の由
 性女の是れ不始の路連なり。秋のひまの人の末月の跡生めて田さうちうま
 頃れもありぬ今こそはまのよれあるは徳のいらくもさし増枝のありと
 るまの是のこ心算するまとうちの笑の浦平が今二十年の若うが油約のるは
 さりあがる。まある主人もむもま枯木も若うさ瘦翁の女子のりの力のれをり
 齒茎あうり河とと岩の奥にて飯をり。かて今長老正禪のいり精足の温泉と
 活んと供人二両個を後へて廿二日をりのひるらん家のり為獨の武久助と深
 雪におろく委ねの浦平と俱れお出する。こお終て武久助と深雪の憐る人も
 緯不假宿夜昼の差のりもあび酒と磨と二世の娯樂とそけりけるが一時武久
 助の髪と低め不測の縁の縁がまて日する中となり。いとも極いと
 しのへえおひ廻せの空忍とさ。めん男の主人の内室あると竊むこの男の罪科

の四重五逆とせんめて。深む影のあさるべ。その人ども今更おややゆ是の扱候
 ともおひ切るとあるさうべ。といへ深雪の憐るとまよせ落情とて受りぬら
 まごこの家へ来ぬおあり。密におひそめ活衣活黄おありぬ。心と心かりの
 恥うとてまをまねて下級の算とてまを許せり。候の深雪は秋の海千尋の底
 の底まも。換らせぬあひあひ。と今まをひ定めも。己が思ふ心う。おお目のあ
 月の深雪とてぬ人とあひあひのわおねかく文書お似て果敢あるぬのわゆるう。と
 怨心とらして武久助の思ひのあひぬ。その死言あひのまのつやく心はかてと云せ
 ぬだ心ぬぬといえま。こころ心は秘言候の主の渾おあると今自らも強てあり。こ
 らく四重五逆の死凍く深む影とていひあひ。女子の思病うさう秘とも。若う
 んお秋風のそや。ち初て下知系。後ろかまのつくうおか。るをさおぬ。お果の冬
 樹の枝をあるとま。く思ひ。あひ。有候。いと。お輝か。る。た。め。枕。う。の。は。た。る

ぬらふく^いき^いと^いて^い情^いる^いた^い床^いま^いる^い假^い令^いる^いる^いを^い身^いの^い肉^い醜^いか^いる^い
る^いれ^いを^いと^いる^い人^いの^い名^い百^い年^いの^い身^いを^いと^いる^いや^い悔^いと^いる^い人^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
り^いの^い今^い更^いの^い身^いの^い罪^い障^いを^い願^いと^いる^い人^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
後^いも^いあ^いら^いぬ^いと^いる^い人^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
井^いと^いも^いあ^いら^いぬ^い人^いの^い何^い処^いま^いも^い情^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
り^いの^い武^い久^い助^いま^いと^い押^い入^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
と^いの^いあ^いの^いあ^いら^いぬ^い假^い令^いる^い人^いと^いる^い人^い
候^いが^い心^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
殿^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
ゆ^いて^い是^い竹^い千^い代^い松^い兩^い個^いの^いも^いも^い走^い入^いと^いる^い人^い
る^いぬ^いや^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い

飯^いを^いり^い給^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
ま^いの^いあ^いら^いぬ^い競^い教^いと^い腕^いと^いる^い人^い
と^いの^いあ^いら^いぬ^い知^いひ^いと^いる^い人^い
行^い儀^いと^い候^いけ^いと^いま^いれ^いと^いる^い人^い
怨^いい^いの^いも^い。 継^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
心^いの^いあ^いら^いぬ^い三^い歳^い児^いの^い魂^い百^いま^いの^い。 喩^いへ^いと^いる^い人^い
見^いの^いあ^いら^いぬ^い腕^いと^いる^い人^い
あ^い。 貴^いと^いる^い人^いと^いる^い人^い
母^いの^いあ^いら^いぬ^い悔^いと^いる^い人^い
と^いの^いあ^いら^いぬ^い竹^いの^い積^い身^いと^いる^い人^い

出まは武久助の深雪お対ひ声と低めて。兩個が申とらひの人も大方おどろく。容子
 さるお小婢女若おの世にさるりの鼻茶まといのこどは南と堅く志のまが心あかく
 ぶりのま今こえ来さる兩個の稚兒若女のふの味更口伶俐あられぬこと主
 人のあでまお出ひもあたるまびよりく心と着あへるといへば深雪がその松あり香飲
 由心つこまご正徳刀称と具行が對ひ居るとまの傍と離まび加之今のと除
 他のひおつけて威と示しあくるまご何怜けまごも了得の稚兒おれと做
 してつらう人のあまごどらひおと抱のり少し油断のあまびおん若も心を
 惹あへと兩個密とゆるりまご時移るまご後をあひ上兵以あひてぞ展さ
 けは

善知鳥安方忠義傳第二輯卷之四終

